

## イギリス水禽協会巡り(4)

内田 映

### —スリムブリッジでの水禽類観察—

昭和52年12月27日、英国水禽協会会長国際水禽調査局長ジョfrey・マシューズ教授の歓迎挨拶と案内予定の説明をスリムブリッジ協会本部玄関入口の部屋で聞いた後、我々はマ博士の案内のもとにスリムブリッジ構内を見学することになった。

裏側の出口へ出るため次の室に入ると、無料提供の印刷物が沢山あって、他の6箇所の協会保護区の概要や其所の水禽類の概況も分るものであった。更に次の部屋を通ると、水禽類の写真が沢山展示してあった。先程硝子窓越しに見ていた池のほとりに出ると、カオジロガン、ハクガン、オオハクガン、ホンケワタガモ、ツクシガモ、アカツクシガモ、クロガモ、オナガガモ、ヨシガモ、ホオジロガモ、オオバン、Ringed Teal (*Anas leucophrys*、南米産)、White-faced whistling Duck (*Dendrocygna vidua*、南米・アフリカ・マダガスカル島産)、South African or Cape Shelduck (*Tadorna cana*、南アフリカ産)など沢山の池に静かに泳いだり、土の上で休んでいるのには驚く。道路の反対側の池には、カオジロガンの群、ハクガン、アカオタテガモが、はっきりと観察出来た。また池の中の岸辺の土が、こんもりと高く出ている所にハワイガンが3羽じっと休んでいた。ハワイガンについては、22号でも詳細に記述しておいたように、ハワイ諸島の生息地で絶滅しかけた時、1951年に3羽がスリムブリッジへ送られて来て、繁殖に成功し、数を増やして、ハワイ諸島へ送り返されて絶滅から救われたということである。歩いていると、またハワイガンに会い、ゆっくりと近くで写真をとらせて貰った。また

Bronze Winged Duck (*Anas specularis*) も写真撮影した。このマガモ属の一種は、南米チリー及びアルゼンチンのアンデスの斜面に産するものである。

### —アオガンに会う—

池の対岸にアオガン (*Red-breasted Goose*、*Branta ruficollis*) がいると、双眼鏡で見ると、確かに岸の芝生に数羽が見える。胸が栗色で、英名は赤胸となるが、どうしても赤くは見えませんが、眼先の白斑、両脇の幅広い白帯が目立つ特徴がつかめた。早速、300mm望遠レンズを取りつけて撮影する。

このアオガンは、外遊準備中に英国の東京出先、British Tourist Authorityへ参考資料依頼の手紙を出したら、早速に地図や東海岸の州の国立公園2箇所と水禽協会の新聞大の印刷物が届いた。新聞大の印刷物は、一面が水禽協会7箇所の保護区 (Reserve) の概観、裏面は名称は書いてないが、全面アオガンのカラー写真が見事で、魅惑的だった。早速大きな額縁に入れて眺めていた。それで渡英したら是非お目にかかりたいと期待していた雁となった。

和名はアオガンとあるが、これは背面の黒さに青い光沢があるので、標本ではアオガンでよいただろうが、実地に野外で観察すると、この青味は分らず真黒に見える。むしろ英名のように赤胸雁の方が適切な名称ではなかろうかと思ったことだった。

アオガンは、小さい嘴、栗色ののど、胸、顔点、残余の羽毛は黒い中に広い白線や狭い白線の種々入り込んだ目立つ彩色で、最もカラフルなヨーロッパのシジュウカラガン属の雁類である。アオガンは、旧北区の北部中央のソ連ヤマル半島の東側から、東はハタンガ (*Khatanga*)

流域までの北緯73度と67度の間のツンドラ及び低木の生えたツンドラの北極地方シベリアで繁殖する。そして冬にはカスピ海及びアラル海南部ヨーロッパで冬を過す。西部ヨーロッパでは珍しい種であり、イギリスでは18世紀以来記録があるが、稀な渡り鳥である。

スリムブリッジのこのアオガンの廻りにはハクガン、コクガン、キンクロハジロ、インドガン(Bar-headed Goose, *Anser indicus*)、Bronze winged Duckなどもいた。マガンが道路近くや路上まで上って、のこのこと歩いている。友田氏は、日本では珍しくなっているマガンをゆっくりと写真を撮らせて貰うと言いながら、しきりにシャッターを切っていた。

#### 一世界の全白鳥観察一

次いで、ベウイックコハクチョウ(ヨーロッパコハクチョウ)(*Bewick's Swan, Cygnus columbianus bewickii* Yarrell)コクチョウ、ナキハクチョウ(*Trumpeter Swan, Cygnus cygnus buccinator*)などが池で泳いでいるのを写真に撮る。コクチョウ(*Black Swan, Cygnus atratus*)は、昭和49年にオーストラリアへ行った時に写真を撮って来たが、ヨーロッパコハクチョウとナキハクチョウは、初めてであったので、初会見は嬉しかった。更にクロエリハクチョウ(*Black-necked Swan, Cygnus melanocoryphus*)も池畔の芝生に2羽いるのも撮影出来た。これも世界の五白鳥の一つで、初めて見たものだった。北半球にオオハクチョウ(*Cygnus cygnus*)、コハクチョウ(*Cygnus columbianus*)、コブハクチョウ(*Cygnus olor*)、南半球にクロエリハクチョウ、コクチョウである。但しナキハクチョウが、オオハクチョウの亜種から独立種とされることがある。コスコロバハクチョウ(*Cos-*

*coroba Swan, Coscoroba coscoroba*)も白鳥の中に入れられていることがあるが、これはガンカモ科の前記五白鳥と同じ亜科、族に入るが、その下の分類段階の属は異にする。

クロエリハクチョウは、ブラジルの南緯30度、パラガイ、ウルガイ、フォークランド諸島、アルゼンチン及びチリーから、南はテラデル、フエゴ(フエゴ島)までの南アメリカで繁殖する。冬には北方に南回帰線へ渡る。同行の玉田誠氏は、8mm撮影カメラで収められたものを英文でThe Explanation for Some Waterfowls at Slimbridgeとしてまとめられた。それによるとスリブリッジのクロエリハクチョウはエリザベス女王の所有物で、1976年5月にブラジル大統領が公式訪問の際贈られたものであるが、水禽協会で世話するように委ねられたものである。

またナキハクチョウ(トランペットハクチョウ)は、かつて北アメリカを通じて繁殖していた。一時絶滅に瀕したこともあったが、保護政策が取られた結果、次第に増えて、今はアルバータ、ブリティッシュコロンビア、モンタナ、ウヨーミング及びアラスカの内陸で繁殖することが知られているだけである。個体群は現在、近年かなりの増加を現わしていて約7,000羽を数える。

#### 一ミカドガン、コクガンと記念撮影一

更に歩いていると、道路上をミカドガンとコクガンが、よちよち歩いていたので、この鳥たちと記念撮影をしようと、持っていたパンのかけらをちぎって撒くと足許に寄って来たので、私の写真機を近くにいた人に頼んで写して貰った。

ミカドガン(*Emperor Goose, Anser canagicus*)は、コツエビュー入江からユーコン川及びクスコクウイン川へのアラスカの北西部海岸、セントローレンス島及びチュクチ半

島に沿うアナデルからのシベリヤで繁殖する。冬にはアリューシャン列島及びアラスカ半島で過し、稀にはブリティッシュコロンビアからオレゴン州やカリフォルニア州の太平洋岸に渡来する。日本では、昭和39年11月～40年2月に、仙台市福田町の水田跡で、マガンの群の中にいた成鳥1羽の迷行例があるだけと言われる。

コクガン (Brent Goose, *Branta bernicla*) は、最も北部で繁殖する雁類の一つで、カナダの北極の諸島、北部グリーンランド、スピッツベルゲン、フランツジョセフランド、北部シベリヤに産する。3-4亜種があり、そのうちの1亜種、*B. b. orientalis* は、日本へは主として北海道、本州中部以北の海岸に少数が冬季に渡来する。島根県の中海でも、かつては採集されたり、また昭和49年11月に渡来が確認されている。

#### 一アメリカコハクチョウ、オオハクチョウ、 コスコロバハクチョウ

珍しくも、アメリカコハクチョウ (*Whistling Swan, Cygnus columbianus columbianus*) が2羽いて、柵のところまで来て餌をねだっていた。明らかに真黒い嘴の基部、眼先に僅かの黄点を見ることが出来た。お蔭で、初めて会ったのに近写が出来て楽しかった。

日本では、昭和43年1月、49年2月福島の猪苗代湖、47年11月、49年1月に宮城県の伊豆沼、49年2月新潟県瓢湖で観察されたのが初めてである。昭和53-54年冬には、青森県下北半島の大湊湾と尾駁沼に各1羽、計2羽のアメリカコハクチョウの渡来が観察確認された。

島根県鳥類目録 (昭和53、島根県発行) には、アメリカコハクチョウが記載され、"1951. 1 宍道湖南岸の玉造温泉沖の成鳥3羽は追調審議の結果このものと信ぜられる"と書いてある

が、別の頁では昭和31とあり、5年の差異があったりしている。また追調審議とは如何なる検討であったかは何等の説明もないが、恐らく後からの写真からとも思われるが、後年となって疑問の写真だけからの判定では信を置く訳には行かない。

アメリカコハクチョウは、北アメリカの白鳥で、アラスカからカナダのハドソン湾までの北極圏の北方で主に繁殖し、チェサピーク湾からカリタック入江までの大西洋岸及び南部アラスカからカリフォルニアまでの太平洋岸で越冬する。東部シベリヤでも迷鳥が知られている。

このアメリカコハクチョウを観察している時に、路上をのこのことサカツラガン (*Swan-Goose, Anser cygnoides*) が1羽近寄って来た。オオハクチョウ2羽も池の中で泳いでいたのを望遠レンズで撮影しておく。

オオハクチョウ (*Whooper Swan, Cygnus cygnus cygnus*) は、アイスランド及びスカンジナビヤから、東部はカムチャッカ、コマンダー諸島及び日本まで繁殖する。そして越冬はイギリス諸島、西ヨーロッパ、小アジア、北部インド、中央アジア、中国及び日本である。かつては度々見られたグリーンランドでも繁殖したように思える。と P. Scott 博士の著書 (1972) に述べてあるが、現在の日本では繁殖しては居らず、これは南樺太が日本領時代にオオハクチョウの繁殖の事実があったから此の時代の文献によって記述されたものではなからうか。

次にこれも珍しく初めて見たものに、嘴が赤く純白のコスコロバハクチョウの2羽が池で泳いでいた。これは前述のように本当のハクチョウ類 (*Cygnus*) ではないが、よく白鳥類に入られている。コスコロバハクチョウは、南部ブラジル、ウルガイ、アルゼンチン、テラデル

フエゴを含むチリー及びフォークランド諸島で繁殖する。冬はずっと北方約南緯25度までで過す。

### 一 昼食のレストランで

大分時間も経っていたが、昼食も忘れて珍しい雁、鴨、白鳥類を凝視しながら写真も撮影しては皆の後を速足で追っていると本部の建物が見え出した。芝生の上にアオガンの群がいたので急いで撮影後、皆と一緒に食堂に入った。小さい池に面したテーブルに友田学兄と並んで席に着く。

池には桃色の濃いカリブフラミンゴ(Caribbean Flamingo)の美しい群の姿が池面に映っていた。そのほかにGreater Flamingo(ベニフラミンゴ)、Jame's Flamingoもいた。スリムブリッジには、フラミンゴの世界の6種(4種とする鳥学者もある)が集められているのが有名である。食堂に入るまでの構内で、何箇所かの池やそれに続く芝生で、カリブフラミンゴは見なかったが、ベニフラミンゴ、チリーフラミンゴ、アンデスフラミンゴ、ゼームズフラミンゴ、コフラミンゴ(ヒメベニヅル)(Lesser Flamingo)などが見られ、写真撮影しておいた。

会食が終るとマシュウズ博士の席へ行って、松江より持参していた着物姿少女切絵の小色紙と中海のコハクチョウの絵葉書を贈呈した。マ博士は、にこにこことサンキュウ、ベリー、マッチと喜んでいただいた。

### 一 観察小屋と観察塔

遅い昼食して午後、マ博士の案内のもとに今度は隠れ観察小屋(hide)や観察塔(tower)から観察する。ハイドは細長い木造の粗末な小屋で、壁の前面には横に一直線に続く短尺形の硝子窓があって、外側からは、せいぜい顔の半分位しか見えないだろう。この細長い硝子窓の下には、細長い板のテーブルが続き、そして

人がけの木造の板椅子が沢山あった。30人位は、腰かけて外景が観察出来るようになっていた。

前面には沼もあるが、広大な湿原が展開し、遠くに疎林が見えた。草生地には無数のガン類がいた。更に曲りくねった沼にもカモ類が見えた。

外側は土堤、構内側には高い生垣で遮蔽された通路を進むとホルデン観察塔に着く。立派なスポーツマンであり、総べての水禽類の愛好者だったピーター・ウッド・ホルデン氏を記念した観察塔である。薄暗い階段を昇り、三階の最上部は、ここもハイデと同様な短尺形硝子窓からセバン河川敷が大観出来る。直下に小さい隠れ観察小屋があり、それから草生地が少しあって沼となり、その先はまた草生地となり、大きな川、セバン川が見える。前面の沼とセバン川との間の湿地の草生地には、コハクチョウが26羽草を食べていた。日本では殆んど水中にしか見られないコハクチョウが、陸地の草生湿地にいるのは珍しい光景だった。ちなみにスリムブリッジ渡来の白鳥は、中海のようにコハクチョウで、そしてオオハクチョウも中海のように殆んど渡来しない。

### 一 セバン川を眺めて

セバン川の対岸沿は平地で、牧草地が展開し、河岸や牧草地帯にも樹林が少しあり、点々と家も見える。その先は丘陵で、森林となっている。大きなセバン三角江は、セバン川が流入するところである。三角江は更に少し西へ進むとブリistol海峡となる。以下この付近の地理について「Geography of the British Isles in colour by K.B. Stephenson, 1973(中村和郎訳、イギリス、その国土と人、昭和52)」を引用して述べたい。

対岸の森林は、デー森林と言われている地帯で、ブリistolの北を流れるセバン川の西岸にある標高240mの高地で、周囲の低地とは高い急斜面で分けられている。

ブリistolは、スリムブリッジの南方30キロ、セバン三角江の東岸にあって、ブリistol地方のほぼ中心に位して、この地方の最大都市で、人口42万、商業の中心地、主要な銀行、大聖堂などがある。

デー森林地帯では、石炭紀の石灰岩の中に鉄鉱石が発見され、特にこの地方の石炭が使われた時代には、イギリスでも製鉄業地域になっていた。今では鉄鉱石は掘り尽され、炭鉱も総べて閉鎖された。

丘陵の多い土地で土壤がやせている為、農業は殆んど羊と牛の飼育に限られ、土地の大部分は森林である。また石灰岩と砂岩が、道路の舗装材料や装飾用材料として切り出されている。この地域全体が国立公園であり、重要な観光地となっている。スリムブリッジ北方のミッドランド地方からの自動車道とセバン橋の建設によって、デー森林は観光客には行き易い場所となった。

次にスリムブリッジの在る低地は、セバン谷と呼ばれている所である。セバン谷は、デー森林の東方にあり、ブリistolからスリムブリッジ北部のグロスターに広がっている。この地帯は殆んどが標高90m以下の低地であって、ブリistol地方からミッドランド地方への主要な交通路として重要な所である。ブリistolの近郊園芸農業を別にすれば、ここでは酪農が農業の主体である。セバン川沿の平坦な沖積地は排水が悪い為、耕地としては貧弱である。この結果、人口は少ないが、僻地であることが、或種の産業にとっては却って好条件となっている。例えば2箇所に建設された原子力発電所や化学工場がその例である。

セバン谷の北端にあるグロスターは、ローマ時代にはセバン川にかかっていた最下流の橋のたもとに立地した町であったが、今は人口9万で、大きな家畜市場と大聖堂を有する州庁所在

地である。外洋船はグロスターまではのぼって来れないが、スリムブリッジを通るバークレー運河がグロスターまで出来てからは、小型の沿岸航行船が、この町まで来るようになった。然し現在では機械や航空機の製造などを行うグロスターの産業にとっては、運河よりも道路や鉄道の方が遥かに重要である。

セバン谷から東方に急に高くなった地帯がコッツウオールド丘陵で、その頂部は標高210-300mの平坦面になっている。この地域は一時期に牧羊業で有名であり、これを基盤にして16世紀には、イングランド西部に羊毛工業が発達したこともある。コッツウオールド丘陵は、大部分が魚卵状石灰岩から構成されていて、その中に挟まれている砂岩層からは羊毛を洗うのに適した軟水が流れ出ており、漂土と呼ばれる粘土層は、洗剤として使われる。ストラウドには、サージのような特殊の織物をつくる工場は未だ存在している。コッツウオールド丘陵の石灰岩はローマ時代から採掘されており、周辺の町や村では、淡い肌色をした石灰岩で造った建物を見ることが出来る。ロンドンへのモーターウェイ（高速道路）の南側、ブリistolの東方奥地のバスは、エイボン川の河岸にある町で、この温泉はローマ時代から使われ、当時の浴場が今でも残っている。18世紀には有名な温泉となり、ジョージ王朝時代の建物が今も観光客の人気を集めている。

この本には書かれてはいないが、セバン川には、有名な南米アマゾンの大逆流、ポロロッカ（海嘯、tidal bora）程ではないが、小規模の逆流が起るといふ。アマゾン川のポロロッカは、4月の新月の頃に起って海より押し寄せる逆流は岸辺を洗う怒濤で岸辺の竹以外の樹木もなぎ倒される。

#### 一研究所の室内見学一

少し寒くなった中に、水禽協会の本部建物へ

帰ると、庭先に円形の浅い井戸があって、水も底の方に少し堪っていたが、綺麗な水で、コインが沢山底に見えた。円形井戸の喜捨池で、底の方にばかり水が張ってあるようだった。マッシュ博士が、このコインも水禽協会運営費に力を与えていると笑いながら説明されたので、私は50ペンス(250円)コインを投げ入れたが、後に続くメンバーは殆んどなかったのは淋しく思った。

近くに売店があるので行って、鳥の本や印刷物、スリムブリッジ表現のテーブル掛、絵葉書などをかう。矢張り現地では安く買えるようである、というのは私が東京で6,900円で買っていた水禽類の本は、ここでは5,600円であるから、1,300円程安いことが分った。忙しい買物をして、やっと屋外に出るとマ博士は、夕方になると池に照明される場所があって、コハクチョウが集り、美しい光景を現出するので、それを見てから出発の方がよいだらうとすすめられたので、照明下のコハクチョウ群を見てから今夜の宿、リバプールへ出発することになった。照明時刻までには、未だ時間があるので、この間建物の内部をマ博士が案内されるので、一行は後について行く。研究室、実験室、標本室、講堂、マ博士の室、低学年用教室、その他の部屋だったが、その中で、X線による散弾銃弾丸調査の器械装置があり、コハクチョウの体に入った鉛散弾も調べられている。調べられた30%の鳥体には鉛散弾が入っていたという説明があった。標本ではハワイガン、南米産の青い嘴のカモ類、嘴の赤いコスコロバクチョウ(カモハクチョウ)など珍しい標本も眼につく。この研究室には、年間25,000人の学生が訪れるという。また始祖鳥の模型もあった。始祖鳥と言えば、一昨年7月に東京での日本鳥学会研究発表会の帰途に横浜の科学博物館に寄った時に想像図を見たことを思い出した。古い地質時代

の化石から推定の想像図や模型であるから違うのも致し方あるまいと思った。

### 一職員休日の視察一

水禽協会は本日は休日の日だったので、本部の各室には職員の姿は、マ博士のほかは一人も見えなかった。ただしホルデン観察塔の中で、コハクチョウの腰から尾羽が黄色に染められているのは、標識放鳥調査の為であると説明してくれた背の高い一人はいた。職員休日の日であったから、参観人は無い日と思ったが、それでも観察道路を歩いている時にすれ違ったり、一緒に水禽類に見とれた人々は、老若男女子供といろんな人々にも出会った。何れも冬仕度の質素な服装で、けばけばしい服装の人は殆んど見かけなかった。そして写真機も殆んど持っていないが、双眼鏡はぶら下げている。この鳥の楽園を訪れて、しばらくの間、鳥と一緒に静かに観察することによって楽しんでいるようであった。

### 一夜間照明下の白鳥一

やがて日が暮れて、照明燈が池面を照す頃になると、池に面してよく見える硝子窓の部屋に集った。小さい部屋だが、此所からは芝生を経て池面に浮かんで餌を採っている水禽類の世界を美しく幻想的にさえ見ることが出来た。此所では夕方に給餌の麦が与えられていた。私はトンプソン夫人通訳に、照明の目的、どんな効果があるのか、単なる装飾的美化か、幻想の世界の現出か、照明は一晩中か或は途中から打ち切られるかなどを機会があったら聞いて貰うように依頼しておいた。

1946年(昭和21)に水禽協会をスリムブリッジに創立し、爾後マーチンメアー、カアラベロック、ワシントン、ピーカーク、ウェルネイ、アランデルの6箇所をも増設したサー・ピーター・スコット博士には会えないで帰るのかと思っていたら、突然ジャケット姿の老紳士が現

れた。小さい部屋の中は、吾々で一杯で廊下まで溢れているので、部屋の入口の柱際の廊下で説明があった。この老紳士こそピーター・スコット卿であった。そしてその要旨は次の通りであった。

即ち、現在照明中の池には、コハクチョウが240羽いる。照明は美観のほか、此所の12月は早くから暗くなり、午後3時頃から餌が採りにくくなる。それで照明しておく、閃光を見て白鳥が降りて来る。照明は10時頃で打切るが、白鳥は照明が好きで、やって来ては十分に餌が採れる。採食について比較してみたが、照明しない所と差はない。照明を初めてから15年になる。15年前に来た白鳥で、ランスワートと名称がつけられているコハクチョウは、毎年来ており、今年も来て、一時は他所へ行っていたが、また戻った。又、フォリアナとワイヒーの名前を貰っている夫婦は、クリスマス毎にやって来る。4日前に標識調査の為に1回だけ37羽を捕えた。標識調査用に羽に黄色を着色しているが、この黄色着色は、大体次の換羽の時に消えて無くなるが、中には黄色の色を持っている何本かの羽が残っている白鳥もいる。東海岸のウェルネイでは、1,018羽がクリスマスに集り、その中に3羽の黄色着色のコハクチョウがいた。

ピーター・スコット博士にも会え、大要以上の様な話も聞き、更に人に埋っている中だったが、顔も分る写真も撮影出来て喜んだ。

#### ーリバプールへの夜行ー

ピーター・スコット博士は、水禽協会を創立し、水禽類の保護と調査研究、普及などの功によりSir(卿)の称号を授けられている。名残りの尽きないスリムブリッジではあったが、これから今夜の宿泊地リバプールまで240キロを自動車は走らねばならないので、惜しくも午後4時50分、真暗になった中で、マ博士に送ら

れてスリムブリッジ水禽協会にお別れした。尚出発時間が遅れたことをマ博士は、リバプールのホテルまで電話をしておくとの親切な取計りもあった。

リバプールへは夜8時到着の予定で、貸切バスは一路リバプールを目指して北進して行く。時々モーター・ウェイの分岐点あたりには、オレンジ色の外燈が美しく並んでいるのが見受けられる外は、漆黒の真っ暗の中を突っ走っているだけであった。途中には都会もあるが、何れもこの中へは入らず、脇を通っているの、地上進行ではその所在は分らない。これらの都市へは、モーター・ウェイから支線が出ているのである。自動車の混雑、交通混乱を避けるには至当な道路のつけ方で、その都会に入りたい車だけが支線に入ればよい訳で、ここに寄る必要のない車は、市街の中を通らずに真直ぐ走ればよい訳で、日本でもこのようなシステムをもっと真似る必要があると痛感する。休憩駐車地(Motor-Car Service)で、6時50分から10分間停車、下車して用便、車道の脇には雪が見られた。暖冬の英国へ来て初めて見る雪で、大分北の方へ来た感じとなった。売店ものぞいてみたが、何も買いたいものはなかった。また1日中列車というものも見かけなかった。昨日の1日は、時差の関係で非常に長く、またロンドンでの睡眠時間も短かったので、夜の車の中では話し合う者もなく、早くから静かに眠っていた。私も居眠りをしているうちに、午後8時15分にリバプールのアトランチック・タワーホテルに着いた。

## ーリバプールからマーチン・メアーへー

12月28日、アトランティック・タワー・ホテルでのリバプールの一夜が明けた。食堂は眺めが良く、このホテルは、大西洋に注ぐマーシ川河口付近右岸に面した市街に位置していることが分った。このあたりは、リバプール港のドックが集中している所であり、対岸にはバーケンヘッドの市街が展開していた。川底には、二つのトンネルが通じて連絡されている。

リバプール港は、ロンドンに次ぐ大きな港で人口61万、もともとはアイルランドとの交易港に過ぎなかったが、18世紀になってからはイギリスの西岸にあって、北アメリカの方に面している。綿花、煙草、砂糖等を輸入する港として栄えて来た。港の東部内陸の人口246万の工業都市マンチェスターの主要港として発達して来たのだ。1894年には、リバプール、マンチェスター間に運河も開通した。現在世界一と言われる近代的な港湾施設がある。またアイルランドへのフェリー港である。リバプールは、文化都市でもあり、特に音楽方面ではイギリスでの最高水準をゆく王立リバプール交響楽団の本拠地でもあるという。あの世界の若者を熱狂させたビートルズの出身地として、リバプールを有名にしたことは、世界に知られるところである。

出発時間となって、ホテルの玄関に出ると、通りを赤い2階バスが時々通る。付近にバス・センターがあるようであった。また9階建のビルディングが建っていて、上部には二つの塔を持ち、羽ばたいている鳥の飾りが頂にあった。このビルは、ロイヤル・リバー・ビルで、空中高く羽ばたいている2羽の塔の鳥は、リバプールのシンボルとなっているリバー・バードと呼ばれる鳥の飾りであるという。マーチン・メアー水禽協会へ向けて貸切バスは北進して行く。このあたりは、ランカシャー平野と呼ばれている

所で、平坦な部分は表層に氷礫粘土層があるが、これは氷河時代の氷床が溶け去って行く時に堆積したもので、排水が悪く、湛水する所には厚い泥炭が形成されて沼沢地になっている。それで排水工事を行って、土壤の改良が進められて来た。軽い泥炭質土壌には、野菜や園芸作物が栽培され、また冬が温和なので早生種のジャガイモの栽培も可能である。

## ーマーチン・メアー水禽協会ー

やがてマーチン・メアーのビジター・センターに着くと、スリムブリッジ本部のマッシュズ博士から連絡が行っているの、教育係のキャツマー氏に迎えられて案内して貰うことになった。建物の入口には、案内板があって、水禽園(20ヘクタール)、沼地(20ヘクタール)、湿地の保護区(105ヘクタール)の3区域に区割されていることを示していた。域内へは犬を連れて這入ることは禁止され、パーティーは予め予約するようになっており、学校のグループと団体のメンバーは、教育係で案内される。入場料金は、子供では大人の半額、4才以下は無料だが、日本と変っているのに、高令者は25%引きであることである。レストランで軽食も出来、双眼鏡も貸りられる。今年の来訪者は10万人程あったが赤字で、12万人になると収支とんとんになるという。

マーチン・メアーは、リバプールの北方27キロの大西洋岸の行楽地の小さい町、サウスポートの東方7~8キロの所にある。この地帯はランカシャー地方で最も大きかった沼地であった遺跡で、敷地は面積145ヘクタール、水を湛えた所もある草の生えた湿地も包含している。数千羽の野生の雁類、鴨類、渉禽類が飛来して、素張らしい光景も見られる所である。協会では野生の水禽類を全世界から収集しつつあって、100種、1000羽以上になり、ガン類やヨーロッパ種の大きな群に専門的に分けている。大部



分はよく繁殖している。水禽類の収集は、水禽類に対して理想的な生きている状態を与え、そして接近した所で、これらの鳥類を見たり研究する為に、特別に設計され、造園化された地域である。広々とした観察小屋は、7.2ヘクタールの人工池がある沼地での勝れた光景が見られるように建てられている。ビジター・センターは、ノルウェー式丸太設計で建築されたエル字形の大きな建物で、教育センター、映写室、展示室、土産物店、眺望広場などよく設備されている。

### 一水禽園、沼地、保護区一

キャツマー氏に案内されて、センターの後にい出ると、池があって、カモ類が泳いでいた。エル字形の建物の屋根の上は、芝生のように草が生えている。これは上空から見た場合に、建築物はカムフラージュされて、周囲の地上草生地と同調して、野鳥たちも安心して降りて来られるようにという小憎らしいまでの配慮には恐れ入った。

池のほとりを歩いていると、見馴れぬ小形のカモ類が1羽、私の足許の前を横ぎって、行ったり戻ったりして「通せん坊」をした。私はしばし立ちどまって、じっとしているほかなかった。これは餌を貰いたい為であったろうが、私は何も持っていないだったので、可愛想だったが致し方なかった。まことにほほえましい寸時であった。

ホンケワタガモ、ツクシガモのいる小池

小さい池が幾つも連っている水禽園地域を歩くと、水鳥が小池にいる箱庭の風景もなかなか魅惑的な光景だった。ここには、ツクシガモ、ホンケワタガモ、スズガモ、ホシハジロ、クロエリハクチョウその他の様々なカモ類が泳いでいた。また地上の草生地にも、シジュウカラガン、アオガン、ヨーロッパマガン、ハクガン、クロエリハクチョウなどが、うずくまったり、

立ったりしていた。更に池のほとり、土ばかりの所にコクチョウがいて、地上を嘴でつついていたが、餌でも落ちていた為であろう。

しばらく行くと、ハイド(hide)即ち細長い隠れ観察小屋に来た。中へ這入ると、スリムブリッジと同じように短冊形の横に長い硝子窓が沢山続いていて、ここから前面の大きな沼に浮んでいるカモ類そのほかの野鳥を観察するようになっていた。遠いので双眼鏡で見ると、ヒドリガモ、スズガモ、コオリガモ、ホシハジロ、オオカモメその他のカモメ類がいた。アカシマアジもいたようだが、これは北米産なので、此所へ移入されたものか。

この沼は7.2ヘクタールの大きな人工池で、僅かの水禽類がオトリの役をするように飼われている。オトリたちは、数千羽の野鳥を引きつけ、秋、冬及び春を通じて、観察小屋から眺めることが出来る。この前方に位置する保護区は約105ヘクタールで、冬の日の間、ここでねぐらに着いたり、食物を取ったりするコザクラバシガン(Pink-footed Goose, *Anser brachyrhynchus*)の数千羽を含む鳥界の目覚ましい光景が観察小屋から見られる。マーチンメアーの呼び物のコザクラバシガンを見たいものだと、双眼鏡をあちこちへ向けるが眼鏡へは入って来ない。丁度傍にキャツマー氏が来たので、コザクラバシガンは、何所にいるのかと聞いてみた。すると、今は沼にはいなく、遙か彼方で飛んでいるのが、それだと教えてくれた。

### 一コザクラバシガンの雁行一

このハイドへ行く道には、土堤が両側に作られていて、人の歩く姿は、湿地や沼にいる鳥たちには見えないようになっていた。また広葉樹の苗木を植えて、将来の並木を期待している所もあった。

観察小屋を出ると、コザクラバシガンの大群

が、彼方で飛行していて、鉤になれ、竿になれと昔の子供達が呼びかけた昔の日本のことを思い起した。

歩いていると生垣の小枝に胸の赤いヨーロッパコマドリ (Robin) がいたり、草地にウタツグミ (Songthrush) が見られた。灌木林にいる小鳥をキャツマー氏に聞いたら、アオガラ (Blue Tit) であった。また芝生にいるヒバリ (Skylark) も指示した。草地にいたハクガン (Snow Goose) やヨーロッパマガン (White-fronted Goose) が、吾々の歩いている柵の方へ近寄ってくる。餌を貰いたい為だろう。倉庫のような建物の屋根にイエスズメ (House Sparrow) が数羽いた。日本にいるスズメとは種類が違うもので、スズメの様な頬の黒い斑点がない。日本産と同種のスズメも居るが、日本の場合と違って都市郊外から山地にいる。

またコザクラバシガンや他のガン類が、大群で上空を通るので写真を撮る。このあたりから吾々と一緒に歩いていた若い女性に、今此の空を飛んでいる群は、どの位の数だろうと質問してみたら、約500羽位だろうと答えた。そして年には2万5,000羽位も訪れるということだった。

コザクラバシガンは、グリーンランド、アイスランド、スピッツベルゲンなどで繁殖し、イギリスへは冬鳥として、9月及び10月頃に渡来して、翌年の4月から5月初に渡去する。

#### 一 ビジター・センターで

屋外の視察を終えて、ビジター・センターに入って、内部の見学をする。ここにも児童生徒の為の教室即ち教育センターがあって、色々な初歩的の資料の絵が壁などに張ってあるのが眼につく。広い中央ホール、展示室、110席のある講堂、研究室、暗室、その他関係室などあって、児童を対象に色々と教育に力を入れていることが感じられた。最後に売店を訪れた。スリ

ムブリッジの売店では、鳥類についての本は、高級な本も多かったが、ここは通俗的な初級の本が殆んどであったので、買いたいものはなく、鳥のカレンダーを買っただけであった。

売店を出て、隣の広い休憩室に出ると、何箇所かの円いテーブルの廻りの椅子は満席で、室内一杯に見学者が溢れていた。先程、外を歩いている時には、曇り日で少し風もあって寒く感じたので、温度を測ってみたら、5°Cであったので、暖房はないが、この休憩室は沢山の人で寒くなかった。私も立ったまま、硝子戸越しに外の池の水鳥などを眺めていると、腕章をつけた守衛老監督風の男が寄って来て話しかけた。今まで何所を見て来たかと聞くので、スリムブリッジを見て来たかと答えると、それは良かった、これからの予定はと更に問うので、今夜はカーライルまで行って泊り、明日はスコットランドに入って、カラベロの水禽協会を訪ねると言うので、ベリー・グッドと言って、何時日本へ帰るのかと続いて尋ねた。ロンドンへ帰って、少し見物してから帰国すると答えると、それは素晴らしい良い旅行だと笑顔で彼は言った。また何時か御会いしようと言うので、彼は手を出したので、二人は固く握手して別れた。

#### 一 マーチン・メアの過去、現在、将来一

マーチン・メア地域は、サウスポートの東方約7キロから8キロの範囲の低地の地帯である。そして5mから6m程の深さで排水された泥炭から成っている。1543年に歴史家は、長さ4.8キロ、幅3.2キロのランカシャに於ける最大の沼沢地であると書いている。この地の最初の排水の試みは、1692年に沼沢地から大西洋の海へ排水路を切る為に地方民約2,000人が雇傭されたことが記録にある。その後も続けて様々な排水の試みが行なわれた。かくしてこの原始の沼沢地の大部分は排水されて、今は耕作に適する所は、最大可能に広く耕作されている。然し

ながら1950年後になってさえ、洪水は度々起って陸地を水中環境とした。この原始的な環境のうち、145ヘクタールを水禽協会は寄付の援助のお蔭を受けたのだった。

湿地主体の保護区では、冬には恐らく数千年の間、ランカシャのこの土地へ来ていたコザクラバシガンの大群を見ることが出来る。1973年12月のこの地域での最大のカウントでは、約1万5,000羽の雁類が数えられた。またオナガガモ、コガモ、タシギの数千羽も産する。協会は、沼沢地の広い地域を掘って、今では大部分で水の高さを制御している。新しい沼沢地と開水域を持つ草本の生えた湿地との新しい隔離は、オグロシギ、エリマキシギ、サンカノゴイ、ヒゲガラのような他の鳥類を誘引することが出来て、渡来しては繁殖するように期待されている。

時々野生の白鳥が、水禽類の他の種類と同様に保護区へやって来る。その他最近の渡来種には、ハヤブサ、コアオアシギ、ハイイロチュウヒ、チュウヒが含まれている。

小生等の訪れた前年の昭和51年9月13日には、秋の最初のコザクラバシガンが渡来している。11月になると、ランカシャー泥炭地には、2万6,400羽という新記録のピークの大群が到着している。そして年末には1万羽と減って行った。コハクチョウは15羽までが、時々見られた。昭和52年1月には、マーチン・メアーで、6,000羽までのコザクラバシガンが渡来したが、コハクチョウは15羽までが、時々見られた。サウスポート湿地には、90羽が屢々訪れた。9月16日には、コザクラバシガンの到着が始まり、そしてマーチン・メアーで最大約8,000羽までとなった。コハクチョウは5羽だったが、サウスポート湿地のグループは、10羽の幼鳥を伴う104羽が最大であった。オオハクチョウも9羽が、12月に一寸訪れた。

#### 一大西洋岸湿地帯の鳥一

午後1時35分、マーチン・メアー水禽協会に別れを告げて、昼食をするサウスポートの街へ向った。車は北の方へ進む。車窓から見る牧草地からタゲリの群れが一斉に飛び立った。キャツマー氏からの助言もあったので、車は大西洋岸地帯を走るようになると、北辺の湿地帯が展開する。丈の低い灌木、地面をおおう草類、水面の光る小さい水溜りが無数に穴をあけていた。このような地帯が、氷河時代の遺跡の氷礫粘土層の所で、排水が悪く湛水しているのである。ユリカモメの群れと近くに数羽のツクシガモが見られた。更に進むと、沖の方に点々とコハクチョウらしい群れが、緑の草生地に草を食べていた。湿地の灌木地帯では、あまり湛水は見られなかったが、二人のハンターが銃を下げて、しきりに地上を探し歩いている。

海岸の干潟付近を通過すると、嘴の赤いミヤコドリの大群が干潟一面に望まれ壮観だった。ハマシギの群れも泥土の干潟に見られた。海岸沿の遙か彼方に灰白色の市街地が見え出すと、やがてサウスポートの街に入った。

#### 一サウスポートの街、昼食のプリンス・オブ・ウエイルズ・ホテル一

中心街を通ると、クリスマス明けの廉売で、人が出ていた。市街の片側にアーケードがあるのは、イギリスでは珍しいという。そう言えば、ロンドンでもリバプールの市街路でも見なかった。今日でクリスマスは終りであったが、英国のクリスマスは日本と異り、家庭でクリスマスツリーを華やかに飾り、家族で祝い楽しむという。午後2時10分、プリンス・オブ・ウエイルズ・ホテルへ着いた。

玄関を入ると、広間には大きなクリスマスツリーに未だ無数の豆色電球がついていて美しく、クリスマスの余韻を残していた。食堂に入ると、ウエイトレスは3人とも相当の年のおばあさんばかり、こんなおばあさんが皿を運んで

落しはしないのかと、心配したくなる程のおばあさん方であった。こんなおばあさんまで、イギリスでは働くのかと、今までの英国観では不思議に思う程だった。

午後3時30分、今夜の宿泊地カーライルへ向うべく、貸切バスの待っている隣の横町まで、ホテルから一寸歩く。このホテルを撮影しておこうと思ったが、ホテルの前の大通りの向う側へ行くには、自動車の往來を避けたりなど、余りにも時間がかかりそうなので止めて、バスの待っている位置からホテルの横面の上部を写しただけで車に入った。プリンス・オブ・ウェールズと言えば、大東亜戦争の緒戦で、シンガポール沖で、日本海軍航空戦隊に撃沈された英国海軍の戦艦であることを思い出した。そしてイギリス国民の中に日本へ悪い感情を抱いている者もあるのが分るような気がした。

#### —カーライルへ北進・ヨーロッパ赤松—

空は珍しくも晴れた中に、北方180キロのカーライルへ向って北進を続ける。また牧草地にタゲリの群れが見えたり、赤松も現れる。赤松は恐らくヨーロッパアカマツ (Scots Pine, *Pinus sylvestris*) だろうと思った。英名はスコットランドの松の意味だが、日本では、ヨーロッパアカマツとか欧州赤松とされている。この赤松は、英国土着の唯一の松である。英国唯一の野生松であっても、その分布は、スペイン、ギリシャから北方は極圏、東方はシベリアまでと、ヨーロッパの大部分に及んでいる。自生の高木が殆んどなくなったイギリスに於ては、木材生産にかなう唯一の自生の針葉樹である。近年になって広範に植林され、今までイギリスの森林面積の $\frac{1}{7}$ をこの樹種が占めるまでに至っている。

また森林樹木としてと同様に、重要な美観としての赤松でもある。樹高は30~40mに達し、樹冠は幹の高い所で形成される。イギリス

では、毎年何百万本も植林しているが、現在ではブリティッシュ・コロンビヤやアラスカから移入したロッジ・ポール・パイン (*Pinus contorta*) が、これ以上に植林されている。この松はアメリカインディアンの小屋の支柱に使われていたものである。ヨーロッパアカマツは、イギリスではナラに次ぐ二番目の森林樹木である。スコットランドでは、高地に野生しており、そして森林や保護樹帯など何所にでも普通に見られるものである。殆んどどんな気候にも、また痩せ地や乾燥土壌にもよく育つ。材質は軟く、建築用材、電柱、垣根支柱、安価な家具、紙パルプなど非常に広く使用される。この木材は天然では耐久力はないが、然しクレオソートは滲透する。

明日はスコットランドに入り、カラベロックの水禽協会を訪れることになっているので、ついスコット・パインのことに触れてしまった。車は相変わらず北へ北へと走って居り、時に黒豚が6頭放牧されていた牧区が車窓を過ぎ去ったり、黒々と茂った老木の雑木林は、ナラ林ではないかと思ったりして、外界を眺めなどしているうちに、モーターカー・サービス・エリアで一休みすることになった。あと60キロで、今夜の宿泊地カーライルである。例によって先ず便所で用を果し、売店に入って見た。国立公園でもある湖水地方のカラー写真集他1冊の雑誌を買った。カラー写真集には、ヨーロッパアカマツが数箇所に出ていた。真暗になった夕方の風は冷たく寒くなっていた。再び車は走り出して、午後5時半にカーライルに着いた。

本田清著 NHKブックス・カラー版

## 「白鳥のいる風景」を読んで

岩田正俊

従来の、日本の白鳥については、近代の写真撮影者アマもプロもが、被写体の好材料として白鳥を取扱い、それらの作品はそれぞれ、何冊かの写真集として出版されている。

一方、瓢湖における吉川氏父子の餌付けに始まり、各地でそれぞれの篤志家が餌付けに成功して、給餌が続けられ、これらの篤志家によってそれぞれの物語りが、数冊発刊されるに到った。

しかし白鳥を学術的良心的に取扱った著述が、いつかは発刊されねばならないが、今のところ真に学術的に、動物科学の一端として取扱っている研究者である学者は見付からない。動物学を専攻している学者或は学生としては、白鳥の生態学的研究に取り組むことは一寸取付きにくい点が多々ある。

日本ではサル或はシカなどについて、学徒による生態学的ないし行動学的研究とその著述はあるが、白鳥に関しては未だ着手している人を知らない。

しかるに、白鳥に関して正しい知識が必要な時折りにもかかわらず、ややもすると給餌者あるいは世の愛鳥家の、人間本位のいわゆる擬人的想像から発言されたことが、マスコミによってまことしやかに伝えられているのが現状である。

かかる時に日本白鳥の会の事務局長の本田清氏は、日本国内否な外国のことまで取入れて、NHKブックスの1冊として、白鳥の「文化、生態、保護」の副題を付して発刊した。実に白鳥の著者として人を得たりというべきで、現代白鳥の学術的な根拠としてこれを述べることのできる人は、本田氏を措いては他にはあり得ない。

特に同氏は新潟地方において20年来、白鳥の観察を続けており、且つこれを学術的根拠に結びつけており、今日の日本における唯一人の「白鳥学」のオーソリティであるといえる。

内容については、この著書の紙数の制限により、著者のうんちくの1部しか述べられないことは遺憾であるが、追って白鳥に関し集大成のできることを信ずる。

先ず日本の白鳥は最近の渡来ばかりでなく、古くから渡来していた史実、或は各地の伝承を詳細に記してあるのは、白鳥に関する認識を新にするものである。

さらに冬鳥として遠くシベリアから渡来する白鳥が、近来北海道ばかりでなく、本州の各地にも飛来し、白鳥に関する新しい関心が自然保護の上からも高められ、手近に認識できる色豊かな白色の巨大な野鳥を見ては、今更ながら驚異の他はない。

この北海道から本州にわたって渡り（マイグレーション）のコースについて、最近に行われた標識鳥によって明かになった事実をとらえて、これを詳細に説明し学術的根拠を述べ、白鳥の自然保護の上にも重大な意義のあることを示唆し且つ教えている。

白鳥（スワン）といっても、日本に渡来するのは主にオオハクチョウとコハクチョウ（旧名ハクチョウ）で、この両種についての形態的区別、特に両種の生態学、行動学についても、最近の情報が伝えてある。

最後に白鳥を保護する上に、その環境及びそれとの関係についても、学術的根拠を述べ、単に観光上のみならず、自然保護の上からの重大性を説き、テクエコロジー（技術生態学）上からの今後の保護の方法が重要であることが説いてある。

付録的に英国の白鳥研究所を著者が観察して、単なる保護でなく、それに必要なための研究と実験に重要性があることが述べてある。

（会員、医博、動物学者）